パーソナリティ研究
2006　第14巻　第2号　161–170

原　著

© 日本パーソナリティ 心理学会 2006

おそれ型の愛着スタイルにおける攻撃性の抑圧
── P-F スタディを用いた検討[1)]

工　藤　晋　平
九州大学大学院人間環境学府

成人愛着スタイルの1つであるおそれ型の攻撃性の高さについては，これまで一貫性のない報告がなされてきた．本研究は攻撃性の抑圧，特にその防衛的な側面の抑圧という観点から，この攻撃性のあり方を検討することを目的としている．P-F スタディを用いて攻撃性を，日本語版 RQ を用いて愛着スタイルを測定し，大学生・大学院生の女性206名を対象に分析を行った．その結果，他の愛着スタイルと比べておそれ型には潜在的な水準での攻撃性の抑圧が存在し，特に攻撃性の自己防衛的な側面が抑圧されていることが示された．この結果から，これまで一貫性のなかった知見は，攻撃性の抑圧という同じ現象の異なる側面として捉えられることが示唆された．

キーワード：おそれ型愛着スタイル，攻撃性，抑圧，P-F スタディ

問　題

本研究は4分類の成人愛着スタイル (Bartholomew & Horowitz, 1991) の1つであるおそれ型に注目し，その攻撃性について投影法によってより潜在的な水準で検討することを目的としている．1980年代に成人愛着研究が始められて以降，Bowlby の仮定したように成人における愛着の個人差が実証されてきた．しかし，その理解にはまだ未整理な部分も多く，その1つにはおそれ型の病理性をめぐる問題が含まれている (Shaver & Mikulincer, 2002).

4分類の成人愛着スタイル

成人愛着研究の先駆けとなった Hazan & Shaver (1987) は成人愛着について3分類（安定型，アンビバレント型，回避型）の愛着スタイルを想定した．これは幼児期の愛着が成人期においても連続するとの仮説に沿う形で定められていた．Bowlby (1973, 1980) 自身はこれに関して，内的作業モデルの存在を仮定し，幼少期の関係から他者の表象とそれと相補的な自己の表象が形成され，この内的作業モデルが以降の愛着に影響すると述べていた．Bartholomew & Horowitz (1991) はそれを受け，他者が助けとなるかどうかという他者観，その他者から価値ある存在と捉えられる自分であるかという自己観の2つの次元から愛着スタイルを分類しうると考えた．彼女らによれば安定型 (Secure) は肯定的な他者観と肯定的な自己観を持ち，他者との親密な関係に心地よさをおぼえながら，自律も重んじる．軽視型 (Dismissing) は従来の回避型から分けられたもので，否定的な他者観と肯定的な自己観を持つ．親密さに不快感を覚え，自律を重んじる．とらわれ型 (Preoccupied) は従来アンビバレント型と呼ばれてきた愛着スタイルに

1) 本論文の作成にあたり有益な助言を頂いた，九州大学の中尾達馬さん，池田浩さん，三沢良さん，また日頃よりご指導いただいている九州大学の北山修先生に心より感謝いたします．

相当し，肯定的な他者観を持つが自己観は否定的である．そのため自尊心が低く他者を頼り，依存的で不安が高い．一方おそれ型 (Fearful) は軽視型とともに従来の回避型から分けられたものであるが，他者観，自己観ともに否定的であるとされる．そのため他者との親密さを求めながら，同時に不信感も抱いている．

この他者観，自己観の2次元が愛着スタイルを把握する潜在的な次元として有効であることは確証的因子分析や2次的因子分析などによって実証されてきた (Brennan, Clark & Shaver, 1998; Griffin & Bartholomew, 1994)．中尾・加藤 (2003) においても，従来の3分類に対応する多項目式の質問紙が同様な2次元から捉えられている．3分類との重なりについてもおおよそ想定された通りであり，回避型を2つに分けるこの4分類の愛着スタイルは現在新たな分類法として幅広く用いられている（中尾・加藤，2004b）．

攻撃性の観点

しかし，この4分類の愛着スタイルによる個人の理解に関してはまだいくつかの問題も残されている．その1つは新たな愛着スタイルの1つであるおそれ型の位置づけや病理性に関する問題である (Shaver & Mikulincer, 2002; Simpson & Rholes, 2002)．おそれ型は Bartholomew & Horowitz (1991) に従えば，安定型とは異なるものの軽視型・とらわれ型と同様，愛着行動や情動制御など愛着の組織化がなされた愛着スタイルであると捉えられる．これに対し，Simpson & Rholes (2002) はおそれ型における近接の維持と放棄という矛盾した愛着方略の存在を指摘し，これが愛着の組織化の欠落した病理性を示していると論じている．実際，おそれ型と境界性人格障害との関連が指摘される (Agrawal, Gunderson, Holmes & Lyons-Ruth, 2004) 一方で，病理性と関連する組織化の欠落をおそれ型とは独立したものとする研究もあり (George & West, 1999)，両者の立場はともにありうるように思える．

Simpson & Rholes (2002) はおそれ型の病理性が強調される1つの根拠として，おそれ型における攻撃性の高さをあげている．確かにある種の性犯罪者 (Hudson & Ward, 1997) やパートナーへの暴力行為を示す者 (Dutton, Saunders, Starzomski & Bartholomew, 1994) にはおそれ型が多いという報告がされている．健常群においても，おそれ型は相互攻撃的な恋愛関係に関与しやすいことを示す報告もある (Bookwala & Zdaniuk, 1998)．しかし，一方ではこうしたおそれ型の攻撃性の高さを支持しない研究もある．例えば，Bartholomew & Horowitz (1991) によるとおそれ型の対人関係はとらわれ型・軽視型の両者と比べて独裁的，競争的でなく，むしろ内向的，非主張的であり，そこからはおそれ型における攻撃性の高さは想定されない．実際，おそれ型における特性的な怒りの高さは見られず (Magai, Hunziker, Mesias & Culver, 2000)，おそれ型の性犯罪者の収容施設での攻撃性も高くはない (Jamieson & Marshall, 2000)．このようにおそれ型の攻撃性に関する知見には一貫性がなく，したがって，Simpson & Rholes (2002) が言う程に，それを病理性の根拠とすることはできない．おそれ型の位置づけや病理性を理解し，整理するためには，攻撃性についてのより詳細な検討を行うことが求められている．

これを行ううえで，Mikulincer (1998) の研究は示唆的である．Mikulincer (1998) によれば従来の回避型（i.e., 軽視型，おそれ型）には，情動制御あるいは情報処理のあり方として抑圧的な方略 (Shaver & Mikulincer, 2002) が用いられているという．この方略は不快な情緒や情報を意識から排除することで自己の安定を図ろうとするもので，おそれ型においてはその一部として攻撃性に関しても抑圧が行われている可能性が考えられる．Bookwala & Zdaniuk (1998) では，とらわれ型が常に攻撃性の高さと関連を示すのに対し，おそれ型においては主張性や親密さの困難といった関係上の問題に媒介されて攻撃性との関連が表れることが示

されている．攻撃性の抑圧という観点に立てば，これは通常は抑圧されている攻撃性が，強いストレスとなる関係上の問題に直面することで顕在化するのだと考えられる．ここでの抑圧は意識的な抑制とは区別された潜在的・無意識的なメカニズム (Freud, 1915) を意味しているが，おそれ型では潜在的な水準で攻撃性の抑圧が働いていると考えれば，表面的には一貫性のないように見えるおそれ型の攻撃性も，実際には同じ現象の異なる側面として理解することができる．

さらにこの攻撃性の抑圧に関して，怒りの中心的な機能として自己防衛的な側面を強調する Bowlby (1980) に従えば，攻撃性が抑圧されることで特にその防衛的な側面こそが強く抑圧を受けると考えられる．攻撃性の抑圧によって自己防衛の脆弱性が生じるために，何らかの困難に直面した時にはかえって自己防衛のために過度の攻撃性の表出が行われると考えられるのである．本研究の目的は，こうしたおそれ型における攻撃性の抑圧について，特に防衛的な側面に注目しながら検討することであり，それを通しておそれ型の愛着の組織化や病理性，その位置づけについて論じることである．

P-F スタディ

こうした個人の攻撃性の抑圧を測定する道具の1つとして，Rosenzweig (1945) による P-F スタディをあげることができる．P-F スタディは個人の全般的な攻撃性を測定するための投影法とされるが[2]，Rosenzweig (1976) はその測定の水準を，意識的な水準よりも潜在的な水準に位置づけている．実際，潜在的な要因として P-F スタディによる攻撃性が臨床群と関連すること (e.g., Rosenzweig & Rosenzweig, 1952) が示されている．

P-F スタディにおいてその攻撃性は，「方向」と「型」という 2 つの次元（各 3 水準），およびその組み合わせによる 9 つの下位カテゴリーから捉えられる[3] (Table 1)．攻撃性の「方向」については，他責（他者や外界へ向けられる攻撃性），自責（自分に向けられる攻撃性），無責（攻撃性がどこにも向かわない状態）の 3 水準が想定されている．攻撃性の「型」については，障害優位（障害となる状況やそれによって生じる苦痛に言及することで間接的に示される攻撃性），自我防衛（障害をもたらす他者に対して自分を守るために直接的に示される攻撃性），要求固執（障害や欲求不満の解決を目指す攻撃性）の 3 水準が想定されている．下位カテゴリーはそれらの組み合わせであり，これらの指標を通じて攻撃性が捉えられている．

このうち「方向」における無責 (M-A) の水準やその下位カテゴリー (M′, M, m) が，抑圧の存在の指標（林・住田・一谷・中田・秦・津田・西尾・西川，1987）とされるほか，「型」における自我防衛 (E-D) の水準は攻撃性の防衛的な側面を捉えている．このように P-F スタディでは，比較的潜在的な水準で，攻撃性の抑圧，および攻撃性の防衛的側面をともに測定することができる．したがって，これを用いることで本研究の目的であるおそれ型における攻撃性の抑圧と，特に自己防衛の側面の抑圧を明らかにすることが期待される．

以上のように P-F スタディを用いて個人の攻撃性を測定すると，おそれ型について以下のような仮説が立てられる．

1．おそれ型において攻撃性の抑圧が見られるとすれば，他の愛着スタイルに比べて方向の次元

2) Rosenzweig (1976) の言うアグレッションは必ずしも文字通りの攻撃性を意味しないとされるが（林ほか，1987），実質的にはこれは攻撃性を測定する投影法として用いられており（例えば武田，2000），ここでもそれにならい，これを攻撃性の測度として考えている．

3) 次元の水準，下位カテゴリーとここで呼んでいるものは，通常は次元のカテゴリー，評点因子と呼ばれる．しかし因子という言葉は誤解を招きやすいと考え，これを下位カテゴリーとした．それにともないカテゴリーと下位カテゴリーとの区別がつきにくいと考え，カテゴリーを次元の水準とした．

Table 1　P-F スタディにおける次元の水準と下位カテゴリー（林ほか，1987 を元に作成）

	攻撃性の型		
	障害優位型 (O-D)	自我防衛型 (E-D)	要求固執型 (N-P)
攻撃性の方向			
他責的 (E-A)	他責逡巡反応 (E′) 欲求不満を起こさせた障害や苦痛の強調にとどめる反応 「困ったなあ」など	他罰反応 (E) とがめ，敵意などが外界や他者に直接向けられる反応 「どういうことだ」など	他責固執反応 (e) 解決のために他者が何かをしてくれることを期待する反応 「なんとかしてくれ」など
自責的 (I-A)	自責逡巡反応 (I′) 欲求不満を起こさせた障害の指摘は内にとどめる反応 「ええっ」といった驚きなど	自罰反応 (I) とがめや非難が自分自身に向けられ，自責・自己非難の形をとる反応 「すみません」など	自責固執反応 (i) 解決のために自分自ら努力したり，罪償感から罪滅ぼしを申し出たりする反応 「弁償します」など
無責的 (M-A)	無責逡巡反応 (M′) 障害の指摘は最小限度にとどめられ，時には障害の存在を否定するような反応 「たいしたことじゃない」など	無罰反応 (M) 欲求不満への非難を回避し，ときには仕方がないと相手を許す反応 「仕方ない」など	無責固執反応 (m) そのうち欲求不満の解決がもたらされるだろうといった期待が表現される反応 「なんとかなるよ」など

に関して他責 (E-A) が低く，無責 (M-A) が高くなる．

2．特にそれが防衛的側面に見られるとすれば，型の次元の自我防衛 (E-D) と他責，無責の組み合わせである他罰反応 (E) が低く，無罰反応 (M) が高くなる．

他の愛着スタイルに関しては，

3．苦痛を強調し (Shaver & Mikulincer, 2002)，依存的なとらわれ型は他の愛着スタイルに比べて他責逡巡反応 (E′)，他責固執反応 (e) が高くなる．

4．安定型は葛藤場面において効果的なコミュニケーションをはかるとされ (Shaver & Mikulincer, 2002)，他の愛着スタイルよりも要求固執 (N-P) が高くなる．

軽視型は敵意の高さと抑圧の存在とが指摘されるため (Shaver & Mikulincer, 2002)，これについては探索的に検討する．

方　法

調査協力者

調査協力者は大学生，大学院生 258 名（男性 32 名，女性 226 名；平均年齢 21.5 歳，*SD*=1.63）．男女の比率に偏りがあるため，回答に不備のあったデータを除いた 238 名（男性 32 名，女性 206 名）から，今回は女性のみ（平均年齢 20.9 歳，*SD*=1.40）を分析の対象とした．

測度

愛着スタイル　個人が 4 分類の愛着スタイルのどれに該当するかを測定するために，Bartholomew & Horowitz (1991) の RQ (Relationship Questionnaire) を用いた．これは強制選択式の質問紙で，提示された各愛着スタイルの特徴のうちもっとも自分に当てはまると選択されたものがその個人の愛着スタイルとなる．加藤 (1999) によって日本語版が作成され，中尾・加藤 (2004a) によって妥当性が確認されている．

P-F スタディ　日本語版を作成した林ほか (1987) のマニュアルに従って教示，評点を行った．

P-F スタディには 24 の欲求不満場面が描かれており，調査協力者にはそれぞれの場面で登場人物がどのような発言をするかを考えてもらい，それを吹き出しの中に記入してもらう．

回答は，方向と型からなる，9 つの下位カテゴ

リー (E′, I′, M′, E, I, M, e, i, m) のいずれか，あるいはその組み合わせによって評定される．24 の場面にこの下位カテゴリーがどれだけ現れたかが，各下位カテゴリーの得点として集計される．その際，1 つの場面に複数の下位カテゴリーが評定されれば，組み合わされた下位カテゴリーの数で 1 を割った得点がそれぞれに与えられる．例えば，ある場面での回答が E と評定されれば E に 1 点が，E と I の組み合わせと評定されれば E と I それぞれに 0.5 点が与えられる．これを 24 すべての場面について行い，それらを下位カテゴリーごとに合計し，各下位カテゴリーの合計得点を求める．さらに各水準に属する下位カテゴリーの得点を合計して次元の水準ごとの合計得点を求める．全回答の得点を合計すると 24 点になる．

各水準，各下位カテゴリーはそれぞれ 0–24 の値をとるが，分析に関しては次元の水準，および下位カテゴリーが互いに独立ではないため，武田 (2000) にならいそれぞれに一元配置の分散分析を行った．

手続き

個別の実施，または授業での配付によって行った．授業での配付では各自に持ち帰ってもらい，1 週間後に回収した．その際，研究への協力は任意であること，また無記名で行うことを説明した．P-F スタディについては，個別の実施においてどのような場面か分かりにくいと質問のあった項目について，その場面を説明する注意書きを添えた[4)]．

4) 注意書きを添えた場面とその内容は以下の通り：場面 7「レストランで左側のウェイターから言いすぎだと言われている場面」；場面 9「質屋に預けたレインコートを引き出そうとしている場面」；場面 11「夜中に間違い電話がかかってきている場面」；場面 20「招待しなかった人たちが左側に，招待されなかった人たちが右側に描かれている」；場面 23「叔母さんがお別れするために会いに来たいというので，足止めされそうになっている場面」

結　　果

各愛着スタイルの割合

各愛着スタイルの人数は安定型 55 人 (26.7%)，軽視型 10 人 (4.9%)，とらわれ型 95 人 (46.1%)，おそれ型 46 人 (22.3%)であった．これは日本における先行研究と同程度の割合であった（e.g., 中尾・加藤，2004a）．

愛着スタイルと攻撃性の方向・型

P-F スタディの 2 つの次元（各 3 水準）の愛着スタイルごとの平均値を求め，愛着スタイルを独立変数，P-F スタディの各水準それぞれを従属変数とする分散分析を行った (Table 2)．その結果，攻撃性の方向に関して，E-A ($F(3, 202)=7.29$, $p<.001$), M-A（$F(3, 202)=5.99$, $p<.01$)で有意差があった．

このうち愛着スタイルの主効果の見られた E-A, M-A について，Tukey の HSD 法によって多重比較を行った結果，E-A においてはおそれ型が安定型，軽視型，とらわれ型（すべて $p<.01$）に比べて有意に得点が低く，M-A においては逆に，おそれ型が安定型 ($p<.01$)，軽視型 ($p<.05$)，とらわれ型 ($p<.01$) に比べて有意に得点が高かった (Table 3)．

これらの結果はおそれ型における攻撃性の抑圧を仮定した仮説 1 を支持している．

攻撃性の型の各水準に関しては有意差は見られず，安定型において要求固執 (N-P) が高くなるという仮説 4 は支持されなかった．

愛着スタイルと攻撃性の下位カテゴリー

仮説 2, 3 を検証するためには下位カテゴリーごとの検討を行う必要があるため，9 つの下位カテゴリーそれぞれの愛着スタイルごとの平均値を求め，上記と同様に愛着スタイルを独立変数，各下位カテゴリーそれぞれを従属変数とする一元配置の分散分析を行った (Table 4)．その結果，E ($F(3, 202)=5.75$, $p<.01$)，M ($F(3, 202)=6.05$, $p<.01$)において有意差があった．他の下位カテゴリーにおいては有意差はなかった．

Table 2　愛着スタイルごとの各水準の得点の平均値と標準偏差

		安定型 (*N*=55)	軽視型 (*N*=10)	とらわれ型 (*N*=95)	おそれ型 (*N*=46)	*F* (3, 202)
アグレッションの方向						
他責的 (E-A)	*M*	8.52	9.97	8.29	6.80	7.29***
	(*SD*)	(2.31)	(1.82)	(2.39)	(2.59)	
自責的 (I-A)	*M*	7.64	6.58	7.53	7.87	1.62
	(*SD*)	(1.68)	(1.30)	(1.69)	(1.83)	
無責的 (M-A)	*M*	7.85	7.45	8.19	9.33	5.99**
	(*SD*)	(1.89)	(1.04)	(1.95)	(2.19)	
アグレッションの型						
障害優位 (O-D)	*M*	6.44	6.52	6.58	6.05	.722
	(*SD*)	(1.64)	(1.84)	(2.21)	(2.01)	
自我防衛 (E-D)	*M*	12.20	12.60	12.30	12.39	.165
	(*SD*)	(1.75)	(2.25)	(1.84)	(2.12)	
要求固執 (N-P)	*M*	5.36	4.88	5.12	5.56	.855
	(*SD*)	(1.86)	(2.03)	(1.63)	(1.76)	

注．** $p<.01$，*** $p<.001$

Table 3　愛着スタイルごとの各得点の多重比較

	攻撃性の型		
	障害優位型 (O-D) —	自我防衛型 (E-D) —	要求固執型 (N-P) —
攻撃性の方向			
他責的 (E-A)	他責逡巡反応 (E′)	他罰反応 (E)	他責固執反応 (e)
Sec, Dis, Pre>Fear	—	Sec, Dis, Pre>Fear	—
自責的 (I-A)	自責逡巡反応 (I′)	自罰反応 (I)	自責固執反応 (i)
—	—	—	—
無責的 (M-A)	無責逡巡反応 (M′)	無罰反応 (M)	無責固執反応 (m)
Fear>Sec, Dis, Pre	—	Fear>Sec, Dis, Pre	—

注．Sec ：安定型，Dis ：軽視型，Pre ：とらわれ型，Fear ：おそれ型.
注．5% 水準で有意差.

このうち愛着スタイルの主効果の見られた，E, M について Tukey の HSD 法によって多重比較を行った結果 (Table 3)，E においてはおそれ型が安定型 ($p<.01$)，軽視型 ($p<.01$)，とらわれ型 ($p<.05$) に比べて有意に得点が低く，M においては逆に，おそれ型が安定型 ($p<.01$)，軽視型 ($p<.05$)，とらわれ型 ($p<.01$) と比べて有意に得点が高かった.

これらの結果もまたおそれ型における攻撃性の防衛的側面の抑圧を仮定した仮説 2 を支持している．しかし，とらわれ型の間接的攻撃性 (E′) の高さや要求固執における他責の攻撃性 (e) の高さは見られず，仮説 3 支持されなかった.

考　　察

本研究で得られた結果から，おそれ型の攻撃性について考察を行い，おそれ型の位置づけについて，愛着の組織化や病理性の観点から議論したい.

おそれ型における攻撃性の抑圧

結果 (Table 3) より，おそれ型は直接的にも間接的にも他者や外界への攻撃性を示さず，比較的潜在的な水準において攻撃性，特にその防衛的側

Table 4　愛着スタイルごとの各下位カテゴリーの得点の平均値と標準偏差

		安定型 (*N*=55)	軽視型 (*N*=10)	とらわれ型 (*N*=95)	おそれ型 (*N*=46)	*F* (3, 202)
他責						
他責逡巡 (E′)	*M*	2.91	3.20	3.13	2.55	1.07
	(*SD*)	(1.34)	(.96)	(1.53)	(1.67)	
他罰 (E)	*M*	3.95	5.03	3.71	2.74	5.75**
	(*SD*)	(2.00)	(1.61)	(1.92)	(1.81)	
他責固執 (e)	*M*	1.66	1.73	1.45	1.52	.74
	(*SD*)	(.97)	(1.46)	(.86)	(.98)	
自責						
自責逡巡 (I′)	*M*	1.85	1.48	1.86	1.79	.40
	(*SD*)	(.95)	(.86)	(1.18)	(1.05)	
自罰 (I)	*M*	3.64	3.28	3.65	3.84	.56
	(*SD*)	(1.19)	(.95)	(1.23)	(1.72)	
自責固執 (i)	*M*	2.16	1.82	2.01	2.24	.64
	(*SD*)	(1.25)	(1.09)	(1.12)	(1.13)	
無責						
無責逡巡 (M′)	*M*	1.68	1.83	1.58	1.71	.37
	(*SD*)	(1.04)	(.85)	(.86)	(1.16)	
無罰 (M)	*M*	4.62	4.28	4.94	5.81	6.05**
	(*SD*)	(1.45)	(1.46)	(1.49)	(1.80)	
無責固執 (m)	*M*	1.54	1.33	1.67	1.80	.45
	(*SD*)	(1.08)	(.96)	(.93)	(1.13)	

注．** $p<.01$

面が抑圧されていることが確認された．従来，回避型における情動制御および情報処理の抑圧的方略の存在が指摘されていたが (Shaver & Mikulincer, 2002)，おそれ型ではこの抑圧の使用は攻撃性にも当てはまると言える．

愛着関係の文脈で言えば，おそれ型においては応答的でない愛着対象への怒りや憎しみ，敵意といった攻撃性が抑圧を受けやすいと考えられる．他者への不信感と自尊心の低さからなる内的作業モデルのために，愛情の撤去を恐れて抗議や主張性を持つことが困難になるのだろう．それは自らの怒りや敵意といった攻撃性が他者への訴えとして十分な効果を持つとは思えないような，潜在的な思考につながる可能性がある．あるいは逆に他者との関係を破壊し，他者を傷つけるものとして攻撃性をおそれることにつながる可能性もある．いずれにしても攻撃性によって自己を守り，また他者に働きかけるといった機能性が失われ，P-F スタディ上では防衛的側面の抑圧が示されたものと考えられる．Bowlby (1980) は怒りがこのように防衛的に機能しないことを機能不全として捉えているが，これまでそれはどちらかというと怒りや敵意の強さとして論じられてきた (e.g., Mikulincer, 1998)．しかしおそれ型においては逆に，防衛的側面を中心とした攻撃性の抑圧という形で機能不全が生じていると言えるのだろう．おそれ型の治療目標の 1 つとして怒りが破壊的でないことを知る必要性が言われているが（工藤，2004），そこには親密さへのおそれだけではなく，攻撃性へのおそれも存在していると考えられるのである．

おそれ型においてこうした攻撃性の抑圧という機能不全が示されるということは，言葉を換えれば他者の知覚，情動制御，愛着行動といった愛着に関連した組織化において攻撃性が防衛的に排除 (Bowlby, 1980) されていることを意味している．攻撃性は愛着方略の一部として，例えば抗議，自己

防衛，コミュニケーションの一部として機能することなく，むしろ積極的にその過程から排除されているのである．攻撃性は意識的な統制下にはなく，そのために，通常は攻撃的でないおそれ型が，他者との関係が危機的になり，自己の防衛が破綻の脅威にさらされると，逆に制御不能な激しい攻撃性を表出することになるのだと考えられる．これまでおそれ型の攻撃性については一貫しない結果が示されてきたが，それらはこうした攻撃性の抑圧という同じ現象の異なる二側面を捉えていたのではないだろうか．

おそれ型の位置づけ

このように攻撃性の抑圧として愛着の組織化において攻撃性が愛着方略から排除されること，それ自体を病理の現れとする見方を取ることもできる．しかし，軽視型においては脆弱な自己に関する思考や情緒が，とらわれ型においては自己とは分離した他者の認識が，それぞれ愛着の組織化において防衛的に排除されている（工藤，2004）．それぞれに特有の防衛があり，防衛的に排除される特有の知覚，思考，情緒が存在するのである．したがって攻撃性の防衛的排除だけを取り上げて，おそれ型を病理的な愛着スタイルとして位置づけることはできない．さらに加えるなら，おそれ型の表象は軽視型のそれよりも複雑で自他が区別されている (Levy, Blatt & Shaver, 1998) との報告もある．彼らは表象が精緻になり，自他の分化がなされることを発達的に高次にあることの指標としているが，それに従えば，おそれ型が軽視型以上に高水準の構造を持った内的作業モデルを有するとも考えられるのである．

Simpson & Rholes (2002) が言うようにおそれ型の攻撃性の高さを病理性の根拠の1つとするならば，攻撃性が抑圧されるという本研究の結果はそれを支持しない．さらに，工藤 (2004), Levy et al. (1998) からはおそれ型が軽視型・とらわれ型以上に病理的であるとも言えない．以上のことをふまえれば，おそれ型は，軽視型・とらわれ型と同様の，適応的とは言えないが一定の愛着の組織化を持つ水準に位置づけることが適切であると考えられる．そして，一部の研究で見られるようなおそれ型の攻撃性の突出はむしろ，個人が何らかの病理や関係上の問題の高まりを持つことで防衛的排除が破綻し，愛着方略の中に制御不可能な形で攻撃性が侵入した結果として捉えられるのではないだろうか．

他の愛着スタイルの攻撃性

本研究ではおそれ型以外の攻撃性についても仮説を立てたが，既述のようにとらわれ型における間接的な攻撃性 (E′) の高さは見られなかった．とらわれ型における怒りの体験の強さは様々な研究で指摘されているが (Shaver & Mikulincer, 2002)，本研究からはそれが間接的な形ではなく，より直接的な形で組織化されることが示された．また，軽視型に関しては，おそれ型同様，抑圧の存在が示唆される一方で敵意の強さも示唆されてきたが (Shaver & Mikulincer, 2002 参照)，本研究では，自己防衛のための直接的な攻撃性を組織化するという，敵意的な側面が強調される結果となった．

今回の結果からは，とらわれ型における解決を要求する攻撃性 (e) の高さも見られず，さらに安定型の攻撃性の高さが軽視型，とらわれ型と変わることもなかった．これらは P-F スタディにおける問題解決や攻撃性が必ずしも愛着の文脈にはないために生じたものと考えられる．逆に，おそれ型の攻撃性はそれが抑圧という形をとるために P-F スタディによって確認することが出来たと言えるのだろう．

限界と今後の課題

以上の結果に関しては，いくつかの限界もある．1つは，軽視型の少なさであり，その抑圧の存在の有無などは，更なる検討が必要である．もう1つは，対象が女性のみであることで，従来攻撃性の研究では一般に男女差のあることが言われていることを考えれば，男性についての検討も今後は求められるだろう．

また，安定型の攻撃性については，Bowlby (1980) に従えば，その機能性が適応的であることも考えられるが，こうしたおそれ型以外の愛着スタイルの特徴をより明確にし，また既述のようなおそれ型の攻撃性と愛着の組織化の関係，あるいは攻撃性の抑圧と顕在化の関係について検討するためにも，今後は研究対象を拡大し，愛着の文脈において攻撃性を捉える必要性がある．

それは今後の課題として残されるものの，今回おそれ型における攻撃性，特にその防衛的な側面の抑圧がより潜在的な水準で明らかにされたことは，今後の成人愛着研究にとって意義のあることだと思われる．

引用文献

Agrawal, H. R., Gunderson, J., Holmes, B. M., & Lyons-Ruth, K. 2004 Attachment studies with borderline patients: A review. *Harvard Review of Psychiatry*, **12**, 94–104.

Bartholomew, K., & Horowitz, L. M. 1991 Attachment styles among young adults: A test of a four category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**, 226–244.

Bookwala, J., & Zdaniuk, B. 1998 Adult attachment styles and aggressive behavior within dating relationships. *Journal of Social and Personal Relationships*, **15**, 175–190.

Bowlby, J. 1973 *Attachment and loss*. Vol. 2. *Separation: Anxiety and anger*. New York: Basic Books.

Bowlby, J. 1980 *Attachment and loss*. Vol. 3. *Loss: Sadness and depression*. New York: Basic Books.

Brennan, K. A., Clark, C. L., & Shaver, P. R. 1998 Self-report measurement of adult attachment: An integrative overview. In J. A. Simpson, & W. S. Rholes (Eds.), *Attachment theory and close relationships*. New York: Guilford Press. Pp. 46–76.

Dutton, D. G., Saunders, K., Starzomski, A., & Bartholomew, K. 1994 Intimacy-anger and insecure attachment as precursors of abuse in intimate relationship. *Journal of Applied Social Psychology*, **24**, 1367–1386.

フロイト，S. 井村恒郎（訳） 1970　抑圧　フロイト著作集 6　人文書院　78–86 (Freud, S. 1915 Repression. In J. Strachey (Ed.), 1957 *The standard edition of the complete psychological works of Sigmund Freud*, XIV. London: The Hogarth Press and the Institute of Psychoanalysis. Pp. 143–158.)

George C., & West, M. 1999 Developmental vs. social personality models of adult attachment and mental ill health. *British Journal of Medical Psychology*, **72**, 285–303.

Griffin, D. W., & Bartholomew, K. 1994 Models of the self and other: Fundamental dimensions underlying measures of adult attachment. *Journal of Personality and Social Psychology*, **67**, 430–445.

林　勝造・住田勝美・一谷　彊・中田義朗・秦　一士・津田浩一・西尾　博・西川　満　1987　P-F スタディ解説　三京房

Hazan, C., & Shaver, P. R. 1987 Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 511–524.

Hudson, S. M., & Ward, T. 1997 Intimacy, loneliness, and attachment style in sexual offenders. *Journal of International Violence*, **12**, 323–339.

Jamieson, S., & Marshall, W. L. 2000 Attachment styles and violence in child molesters. *Journal of Sexual Aggression*, **5**, 88–98.

加藤和生　1999　Bartholomew らの 4 分類成人愛着尺度 (RQ) の日本語版の作成　認知・体験過程研究，**7**, 41–50.

工藤晋平　2004 「見立て」における成人愛着スタイルの利用とそのアセスメント　心理臨床学研究，**22**, 406–416.

Levy, K. N., Blatt, S. J., & Shaver, P. R. 1998 Attachment styles and parental representations. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 407–419.

Magai, C., Hunziker, J., Mesias, W., & Culver, L. C. 2000 Adult attachment styles and emotional biases. *International Journal of Behavioral Development*, **24**, 301–309.

Mikulincer, M. 1998 Adult attachment style and individual differences in functional versus dysfunctional experiences of anger. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 513–524.

中尾達馬・加藤和生　2003　成人愛着スタイル尺度間にはどのような関連があるのだろうか？ ── 4 カテゴリー（強制選択式，多項目式）と 3 カテゴリー（多項目式）との対応性　九州大学心理学研究，**4**, 57–66.

中尾達馬・加藤和生　2004a “一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討　九州大学

心理学研究，**5**, 19–27.

中尾達馬・加藤和生 2004b 成人愛着スタイル尺度(ECR)の日本語版作成の試み 心理学研究，**75**, 154–159.

Rosenzweig, S. 1945 The picture-association method and its application in a study of reaction to frustration. *Journal of Personality*, **14**, 3–23.

Rosenzweig, S. 1976 Aggressive behavior and the Rosenzweig Picture-Frustration (P-F) Study. *Journal of Clinical Psychology*, **32**, 885–891.

Rosenzweig, S., & Rosenzweig, L. 1952 Aggression in problem children and normals as evaluated by the Rosenzweig P-F Study. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **47**, 683–687.

Shaver, P. R., & Mikulincer, M. 2002 Attachment-related psychodynamics. *Attachment and Human Development*, **4**, 133–161.

Simpson, J. A., & Rholes, W. S. 2002 Fearful-avoidance, disorganization, and multiple working models: Some directions for future theory and research. *Attachment and Human Development*, **4**, 223–229.

武田洋子 2000 児童期抑うつの特徴に関する一考察：攻撃性を手がかりに 発達心理学研究，**11**, 1–11.

— 2005. 2. 28 受稿，2005. 8. 9 受理—

Fearful Attachment Style and Repression of Aggression on the Picture Frustration Study

Shinpei KUDO

Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University

THE JAPANESE JOURNAL OF PERSONALITY 2006, Vol. 14 No. 2, 161–170

Reports concerning aggression of people who have fearful attachment style have been inconsistent. Some noted higher aggression of the fearful, but others reported aggression no higher than those of other attachment styles. The purpose of this study was to examine the possibility that aggression of the fearful was repressed, and that self-defensive aspect of aggression in particular was implicated. The Picture Frustration Study (P-F Study) and Japanese version of Relationship Questionnair (RQ) were used as the measures of aggression and attachment styles, respectively. Data from 206 women, graduate and undergraduate students, were analyzed. Results showed that the fearful repressed aggression at the latent level, and they repressed self-defensive aspect of aggression more than other attachment styles. It was argued that inconsistency in previous studies stemmed from examining different aspects or phases in repression of aggression.

Key words: fearful attachment style, aggression, repression, Picture Frustration Study (P-F Study)